

## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# 自ら人生を切り拓く人を育てる 「なぜ学ぶのか」から始まるキャリア教育

### — 桐蔭高校(和歌山・県立) —

和歌山県屈指の伝統校が、キャリア教育を軸に教育活動全体を見直し始めました。華々しい進学実績をあげ、未来の日本を担っていく人材の輩出が期待される同校で、なぜ今キャリア教育なのか。その理由と実践の中身に迫ります。

取材・文／藤崎雅子

#### 実践のKeyword

🔍中高一貫 🔍ライフプラン 🔍ジョブシャドウイング 🔍ビブリオバトル  
🔍ディベート 🔍学ぶ理由 🔍到達度テスト 🔍ファカルティ・ディベロップメント

#### キャリア教育の新教科を中軸に 進学校ならではの実践を目指す

和歌山県立桐蔭高校は、県内有数の進学実績で知られる伝統校だ。2007年度より中学校を併設し、6年間を見通した教育により新しい時代のリーダー育成に努めている。

そんな同校が13年度に文部科学省研究開発学校に指定され、キャリア教育の教育課程の研究開発に取り組み始めた。同校のパンフレットやホームページを見るとまず目に飛び込んでくるのが、「桐蔭は、自ら人生を切り拓く人を育てます」という教育目標だ。キャリア教育に時間をかける進学校は少数派だが、同校の岸田正幸校長の言葉からは、キャリア教育実践に対する覚悟がうかがえる。

「生徒にとって大学は1つの通過点にすぎません。進学後も高い志と目的意識をもって変化の激しい現代をたくましく生きていけるよう、将来を見通したキャリア発達を促すことが大切です。日本社会のリーダーとして活躍する人材の育成が求められる進学校でこそ、大学の先を見通した教育が必要ではないでしょうか。本校は、掛け声だけでなく、本気モードでキャリア教育を推進していきます」

全教員の意見を整理・集約し、自らの人生を切り拓いていくために必要な力を中学校・高校それぞれ30項目を設定(図1)。現在、その力の育成を目指す中、6年間の体系的なプログラム構築の途

中段階にある(図2)。

プログラムの中軸となるのは、新たに設計した教科「キャリア桐の葉」だ。研究開発学校の特例として、主に総合的な学習の時間の代替として実施している。14年度の中学1年と高校1年から学年進行で実践を進め、16年度に6年間のプログラムを完成させる計画だ。

また、同校は学力養成もキャリア教育の中に位置づけている。「付けた力30」には、「学習することの意義や目的をしっかりと考えて取り組むことができる」「いつも『なぜ』と追求する気持ちをもって授業や補習に臨むことができる」といった、学びや授業に関する項目も並ぶ。

「われわれがキャリア教育で育むのは、薄っぺらな受験学力ではなく、人生を切り拓く土台となる学力です。しかし、だからといって、受験指導をおろそかにするわけではありません。難易度の高い大学は教育の質も高いことが多く、その後のキャリア形成に影響すると考え、受験指導にも手を抜かない方針です」(岸田校長)

#### 学ぶ意味を自問し 主体的・自発的な学習者へ

では、具体的にどのようなキャリア教育を行っているのか。今年度、高校では1学年が「キャリア桐の葉Ⅳ」、2学年が「同Ⅴ」の各1単位を実施している(図3)。まずはその中身をみてみよう。



### School Data

普通科・数理科学科／1879年設立  
 ／生徒数842人(男子394人・女子448人)  
 進路状況(2015年3月実績) 大学234人・短大1人・  
 専門学校8人・就職1人・その他67人  
 和歌山県和歌山市吹上5-6-18  
 TEL 073-436-1366  
 URL <http://www.toin-h.wakayama-c.ed.jp/>



現在の同校を象徴する「改革と伝統」のモニュメント

### Outline

旧制中学から数えて130年を超す歴史のある進学校。「文武両道」が校訓で、博物学者南方熊楠などの研究者や政治家を数多く輩出してきただけでなく、高校野球の伝統校としても知られている。卒業者に占める現役国公立大学合格者の割合は6割前後。2007年より中高一貫校。2013年に文部科学省の研究開発学校の指定を受け、普通科系高校におけるキャリア教育モデルの研究開発に取り組んでいる。

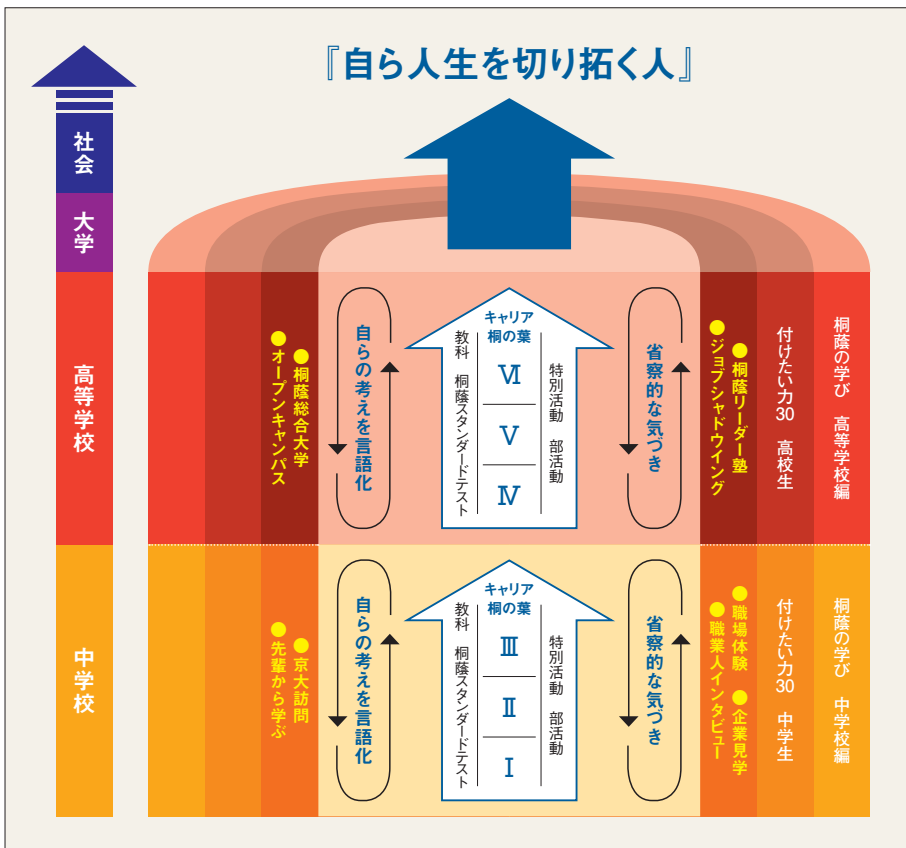
図1 「付きたい力30」高校生版(抜粋)

※全30項目はダウンロードサイトにて紹介 [ダウンロード可](#)

関連する能力	項目の例
人間関係形成・社会形成能力	① 自ら進んで初対面の人に挨拶をしたり、誰に対しても誠実な態度で接することができる ② 全体と異なる意見を持つ者の話をよく聞いた上で説得ができ、グループの一体感を作り出すことができる
自己理解・自己管理能力	⑦ 失敗してもそこから学び、その原因を考え、改善策をとることができる ⑨ 家庭学習の計画を立て着実に実行することができる
課題対応能力	⑫ これまでに身に付けたことを応用して、課題の解決に取り組むことができる ⑮ 研究してまとめたことを、プレゼンテーションソフトなどを用いて発表することができる
キャリアプランニング能力	⑲ 雇用・労働問題や社会保障制度を、これからの自分の生活と絡めて考えることができる ⑳ グループ学習などで、率先してビジョンや方略を打ち出し、課題解決の方法を探ることができる
学ぶ力	㉒ 学習することの意義や目的をしっかりと考えて取り組むことができる ㉔ いつも「なぜ」と追求する気持ちを持って授業や補習に臨むことができる

「キャリア桐の葉Ⅳ」は入学直後、なぜ学ぶのかを問題提起する「桐蔭の学び入門」から始まる。教材として、200ページを超える同校オリジナルの冊子「桐蔭の学び」を配布する。これは同校の教育課程で実施する全教科のほか特別活動や部活動にまでわたって、それぞれなぜ学ぶのか、人生にどのように役立てていくのか、学部・学科や職業との関連などを、同校教員がまとめたものだ。授業はまず学年

図2 桐蔭中学・高校のキャリア教育全体像



全体で同書を用いたオリエンテーションを実施。次に数人のグループで教員インタビューを行い、各自が学ぶ理由を考えて報告書を作成する。この授業のねらいについて、キャリア教育を担当する教頭の歌保晴先生はこう話す。  
 「例えば『音楽は単に歌ったり演奏したりするだけでなく、形のないものを作るといった魅力のひとつ』など、一段深い魅力に気づく生徒もいます。1人ひとりが

学ぶ理由に向き合うことで、その教科・科目の本質的な楽しさに気づき、主体的・自律的に学んでほしいと考えています」  
 その後のプログラムには、社会と接する機会を多く設けている。「桐蔭リーダー塾」では社会で活躍するためにはどんな力が必要か班別に検討し、その内容について、地元企業・団体のリーダー層と意見交換。夏休みは希望者を対象にジョブシャドウイングを実施している。



1人ずつおめめの本を紹介するビブリオバトル。新しいウラスの仲間とつながるきっかけにも



「桐蔭リーダー塾」には会社役員や弁護士など20人の「リーダー」が来校



入学式の午後と翌日に、新入生全員が体育館に机を並べて「桐蔭の学び入門」を受講



冊子「桐蔭の学び」は中学校編と高校編がある。「視聴率は信用できるのか?」「海上で人が浮いているって本当?」などのコラムも豊富

**挫折の可能性も折り込み「15年後の私」を考える**

「キャリア桐の葉Ⅳ」後半の目玉は「15年後の『私』を考える」だ。大学進学の前にある将来の姿から遡って、高校時代になすべきことに気づかせることをねらいとしている。各自が将来の目標にたどりつくまでの道のりを描いてポスターセッションを行い、それを「30歳の『私』の履歴書」として別の形で言語化する。単なる

図3 「キャリア桐の葉」の主な活動内容(2015年度)

キャリア桐の葉Ⅳ(高校1年)		
時期	テーマ	回数
4~7月	○ 桐蔭の学び入門	1
	○ 学びインタビュー	2
	○ 「桐蔭リーダー塾」事前学習	6
	○ 短歌を詠む	1
	○ 桐の葉ノート(新聞コラムを使った学習ノート)の活用	1
	○ 「合格体験記」講義	1
	○ 「桐蔭リーダー塾」開催	1
	○ 夏休みの学習に向けて	1
	○ 「桐蔭リーダー塾」事後学習	3
	○ ジョブシャドウイング(希望者)	-
8月	○ オープンキャンパス	-
	○ 模試の振り返り	1
	○ 15年後の「私」を考える	10
9~3月	○ 30歳の「私」の履歴書作成	8
キャリア桐の葉Ⅴ(高校2年)		
時期	テーマ	回数
4~7月	○ ビブリオバトル	5
	○ 短歌を詠む	1
	○ ビジネスプランングランプリについて知る	1
	○ 労働法を学ぶ	4
8~3月	○ ディベート	19

この一連のプログラムで同校が大事にしているのは、自己との対話により生まれる「省察的気づき」と、社会に出てリーダーとして生きていくために重要なスキルとなる「自らの考えの言語化」を促す点だ。自分の中で問いが生まれるような活動を行うことに加え、その活動ごとに自分自身とじっくり向き合う振り返りの時間を設定。そこで気づいたことや考えたことは、レポートや発表のかたちで言語化させている。

そうした活動の中で自分を変えていく生徒もいる。ある女子生徒は、人前になると緊張で顔が真っ赤になるようなタイプだったが、自ら進んでジョブシャドウ

夢に近い型の進路形成にならないよう、15年間の中には必ず2つの挫折・つまづきを織り込むよう指導しているのが特徴だ。「子どもたちは順調に1歩ずつ階段を上がるような将来を考えがちですが、現実には挫折を繰り返しながら歩んでいくものです。あらかじめ想定しておくことで、実際に節目を迎えた時、真剣に自分と向き合って軌道修正できるように考えればと考えています」(岸田校長)

2学年の「キャリア桐の葉Ⅴ」では、おめめの本を紹介する「ビブリオバトル」や、将来起こりうる挫折や困難と関連した労働法についての学習のあと、現代社会の課題を扱う「ディベート学習」に半年以上かけて取り組む。社会に対する問題意識をもち、自分の意見を発信する力の養成に力を入れている。

「明確なゴールを設定し、その確実な遂行のためにどう授業を行っていくか、ゴールから逆算して考えることになりませ。従来のように、ゴールをはっきりさせず予定調和的に授業を行っていく方法とは大きな違いがあります。もしテストの結果が予想より悪かったら、指導方法や教材を見直すチャンス。これをきっかけに授業の質を上げていきたい」(岸田校長)

また、今年度から「桐蔭FD(ファカルティ・デイベロップメント)教員の能力開発」の体制も整えた。教科ごとに研究テーマを設定して1年間取り組むもので、例えば国語科では今年度、「枕草子のあ

身につけさせたい学力とは? 教員全員で策定、授業改善へ

次に、キャリア教育に位置づけられた学力面の取り組みをみてみよう。同校は授業改善の第一段階として、昨年度から「桐蔭スタンダードテスト」を年度末に実施し、1年間の学習の定着状況を測っている。このテストは、教科ごとに教員全員参加で「桐蔭生として1年間で身に付けさせたい学力とは?」を議論しながら作成したものだ。これにより授業の組み立て方の根本が変わるといふ。

「明確なゴールを設定し、その確実な遂行のためにどう授業を行っていくか、ゴールから逆算して考えることになりませ。従来のように、ゴールをはっきりさせず予定調和的に授業を行っていく方法とは大きな違いがあります。もしテストの結果が予想より悪かったら、指導方法や教材を見直すチャンス。これをきっかけに授業の質を上げていきたい」(岸田校長)

また、今年度から「桐蔭FD(ファカルティ・デイベロップメント)教員の能力開発」の体制も整えた。教科ごとに研究テーマを設定して1年間取り組むもので、例えば国語科では今年度、「枕草子のあ



キャリア作業部会  
2学年担当  
崎山智昭先生



進路指導部副部長・  
キャリア作業部会1学年担当  
木本匡紀先生



教頭  
うた  
歌 保晴先生



校長  
岸田正幸先生



薬剤師志望の生徒が描いた「15年後の私」のポスター。つまづきを乗り越え「頼りにされる薬剤師」に

要約できるようにする」と目標設定し、そのための授業改善をテーマにしている。各教科の代表によるFD委員会を月2回のペースで実施して教科間の情報共有も図り、学校全体で推進していく。

### 教員一人ひとりが キャリア教育を実践

キャリア教育は学校全体で推進するものだが、教員の温度差が問題となるケースは多い。しかし、同校教員のキャリア教育に対する意識は押しなべて高いようだ。教員対象のアンケート結果を見ると、「学ぶことの意義を伝えようとしている」81%、「将来社会の一員として働くことの意味や役割を伝えるようにしている」76%など、多くの教員がキャリア教育の視点に立って生徒に接している。1学年のキャリア教育推進担当の木本匡紀先生や2

学年担当の崎山智昭先生は、「学年団の先生方からも改善案があがってくる」と、教員の前向きな姿勢を感じている。

その理由について木本先生がまずあげるのは、「桐蔭は、自ら人生を切り拓く人を育てます」という端的な目標があることだ。このキャッチフレーズは校内掲示ボードやインフォメーションディスプレイ、各種配布物に頻りに登場し、卒業式の答辞で引用されるぐらい校内に浸透している。また、岸田校長の考えや必要な情報を1〜2週間に1回程度全職員に発信する

「校長メール」や、キャリア作業部会が定期的に発行する「キャリア通信」などが、日常的に意識づけを促進。さらに、外部講師の講演会や先進校視察報告会などの校内研修を昨年度は6回実施し、知識・スキルの向上を助けている。

「全教科の教員で『桐蔭の学び』を作ったことも大きいと思います。各教科で教科の目的や学習する意義、将来何に役立つかを考えたことで、本校のキャリア教育についての認識が深まったのではないだろうか」(崎山先生)

### 「付きたい力」全項目が 前年度より上昇

同校では生徒の活動の振り返り、感想や、生徒・保護者・教員へのアンケート調査をもとに、キャリア教育を多面的に評価している。その一つである「付きたい力30」に対する生徒の自己評価の結果を

みると、すべての項目において、キャリア教育開始前の13年度入学生よりも開始後の14年度入学生の数値のほうが高かった。なかでも「失敗してもそこから学び、その原因を考え、改善策をとることができ」る「学習することの意義や目的をしつかりと考える取り組みができる」などの8項目は、5点満点評価の平均で0.5ポイント以上アップした。まだ単年の結果だが、今後への期待がふくらむ。

一方、同校は進学実績も注視している。しっかりと生徒を大学に接続させてこそ、進学校としてのキャリア教育の成功と考えているからだ。「10年先を見据えれば、勉強とそれ以外の経験を両輪として生徒を伸ばす方向に間違いはない。それを実際の教育で示すことが本校の役割です」(岸田校長) キャリア教育期生が卒業する来年度末、基礎的・汎用的な能力と進学実績はどう推移するか。今後の同校に注目していきたい。

## Voice

### 「キャリア桐の葉Ⅳ」の生徒の振り返りより

**僕** はこの一年間のキャリア桐の葉の授業を通して、仕事とは何なのか?から始まって、将来自分の就きたい職業まで考えることができた。正直なところ、進路のことより今の勉強の方が大事と考えていた僕は、今まで全く大学のこと、職業のことについて考えたことがなかった。(中略)将来つきたい職業を決め、そこから逆算することで、高校生の自分から見えるものと違ったものを見ることができ、今何すべきなのかをよく考えられたと思う。今はひたすら勉強に励むだけかもしれないが、将来のことを考えることも大切であるとの授業を通して感じた。(後略)

**私** は一年間のキャリア桐の葉の授業を通して、自分の将来について考える機会を得ることができた。(中略)企業側からの視点で考えると、大切なのは学力だけではないことがわかる。コミュニケーション力、プレゼンする力、ペーパーテストでははかれないそういった力はどのように身につけていけばよいのだろうか。たとえば、コミュニケーション力は周りとの接し方が顕著にあらわれるものであり、挨拶ひとつとっても、その力の有無が判断されるようだ。また、自分の考えを正確に相手に伝えることは普段の授業でも必要とされる。そう考えると将来につながる力というのは、普段から鍛えられるものにちがいないのだ。キャリアの授業は自分の生活を見直す機会にもなった。

**優** 柔不断な私は、自分の将来の夢さえ定めることができない。画期的なアイデアを世に広める仕事が見たい、英語を使う仕事が見たい、安定した職業につきたい…。願望はたくさんあるが、「この職業!」というのを見つけれないのが現状だ。しかし、キャリアの授業を受ける前は、将来の自分について少しも考えたことがなかった。これだけ理想が出てきただけでも進歩だと思う。(中略)私がキャリアの授業で学んだのは、積極的に自分の将来について考える大切さだ。普通に学生生活を送ってれば、いつかは将来の夢を見つけることができるだろうという甘い考えを以前の私は持っていたが、それではだめだと気付いた。一年間キャリアの時間で進路について考えてきてまだ定まっていなかった。高校一年生の時点でそのことに気付いてよかったと思う。(後略)